

フーダニツト

ここがそうかな

道は川沿いにしずかにすすんで

なごやかに外れていく歌の調子のようにしずみつつ消えている

向こうの崖の 木立の疎らなところ

遠目には分かるのに踏み入ると分からない

再びつづく道の先に

溶けない雪と 朽ちない花ずいが埋まっている

下草に見え隠れしながら

ついてきているのか

みちびいているのか

意外な荷物の意外なおいをみちみち何度も嗅ぎながら

ふええ へりえ うしなわれる

はやく 小さく ほのあたたかな

息づかいと鼓動のひとつがいが

草の方からさけていくようなしなやかな身のこなしで

一足先に日が陰った谷にそつと分け入り

形が木 かたさが人 中身は痛み

茂る

枯れる

炎につつまれ数日をすごす

雪に閉ざされひと冬をうつむく

咲くものは花の上に浮遊する白い花たち

そんな行き止まりに全てをみちびく

大気は辛辣な甘みをはらんで西へと流れ 流れつき

帰さないよとこともなげにあなたたちに言う

木々もタクトを振り上げかまえたきり

ここではかたまっている